

ウッドデッキ便り（2026年4月）

近藤誠一

「準備された心」とは？

”Chance favors the prepared mind.”（チャンスは準備された心にのみ降り立つ）

ワクチンを開発したルイ・パスツールの言葉です。

いま人類社会が大変動期にあるのは、2つの大きな潮流が交差しているからです。

ひとつは科学技術が劇的な進化を遂げていることです。それは生活の利便性を増すと同時に、武器や市民監視に使われています。さらに「効率性」信奉のあまり、社会が矛盾、非合理性、感情などアルゴリズムに乗らない人間性を、あたかも人間の「欠点」として扱っています。科学技術が幸福のための手段であることを忘れ、欲望のために悪用され、また自己目的化しているのです。

ゲーテの「魔法使いの弟子」はこの状況を見通していたかのようです。魔法使いに、留守中に水を汲んでおくように言われた弟子は、労力を惜しんで箒に魔法をかけて水を汲ませます。しかしいざ水が貯ったとき、弟子はこの魔法の解き方を知らないことに気が付きます。箒は制御できず台所は水浸しになります。

弟子が苛立ってナタで箒を真っ二つに割ると、二つになった箒はそれぞれ水を汲み続けます。大事に至る直前、魔法使いが戻ってきて事なきを得ます。

魔法使いは神様、弟子は人間、魔法は科学技術と置き換えてみてはどうでしょう。

その場合、思うようにならぬためにかっときてナタで箒を割るという行為は何を暗示するのでしょうか。核戦争でしょうか。『聖書』では、神様が人間に「知恵の実」を食べることを禁じ、食べると「死ぬ」と予言されました（「創世記」）。魔法使いは家が洪水になる直前に戻って弟子の魔法の悪戯を解いてくれました。神様は科学技術を制御できない人間の浅知恵を諫めて戦争を止めてはくれないということなのでしょう。

ふたつ目は、人類の歴史の中での振り子が、いま理想主義 idealism から現実主義 realism へと大きく振れ始めたことです。人類は長い戦争の世紀を経て、漸く戦後の自由民主主義の普及という平和と繁栄の時代を達成しました。しかしその喜びもつかの間、今や自国ファースト、法秩序より国益、正義よりディールという古い価値観の（いや「価値」という発想がない）時代に、振り子は急速に向かっているのです。

トランプ大統領が個人の力でいまの流れをつくったわけではありません。一般大衆が法治主義、人権主義などのリベラリズム（理想主義）の原理のあまりに行き過ぎた適用についていけず、格差拡大とエリートの傲慢さへの不満を募らせている流れに乗っているに過ぎません。

振り子は一方の極（理念）と他方の極（現実）の間を行き来します。振り子を止める

ことはできません。極端を避けるべく「振れ」の速度と幅を小さく留めるのが精いっぱいです。

科学技術の進歩にどう向き合うか、人間の性である理念と欲望の間の振り子をいかに統御するは「正解」のない永遠の問です。

われわれ個人は人生をどう設計したら良いのでしょうか。まず第一に、そうした社会の2つの流れの、どこに自分の身を置くか（何を自分の「正解」にするか）を決め、それを貫くべく専門の力を磨くことです。第二はリベラルアーツを身につけることです。歴史や古典などの人類の膨大な知恵（AI 向け情報データでなく）を身につけ、グローバルな視点で人と対話することです。このいわば「縦糸」と「横糸」を自分で編み込んでこそ、充実した人生が送れるのです。

アップルの創業者スティーブ・ジョブズ氏が、卒業式の祝辞で connecting the dots と言いました。偶然得た書道の体験という「横糸」のある「点」が、10年後の創業（縦糸）に当たって重要なヒントになったという話です。

横糸の無数の点のひとつを選んで、縦糸の点とつなげたのは、理論でなく“ひらめき”です。そうした「チャンス」が生まれるのは、長期間必死に考えた末にリラックスする時です。眠る前、入浴時、散歩しているときなどです。副交感神経が活性化しているのです。アルキメデスの「浮力の原理」は入浴中でした。パリの森を散歩中に数学の世界の難問の解がひらめいた岡潔氏も、自然の中でゆったりしたとき「意識に切れ目」ができて、熟していたアイデアが顔を出すと言っています（『春宵十話』）。

これがパスツールのいう「準備された心」なのです。



傘寿のとき（2026年3月）